

## ビバハウス便り No.112 「北星余市の存続を何としても勝ち取ろう！」

2016. 5. 5 ビバハウス責任者 安達 俊子

今日はこどもの日！さすがに北海道でも、この余市でも、4月末ごろからは、日差しが急激に強くなり、買い物でよく通る「登街道」沿いの家々の庭の桜も満開！ビバハウスの周りでは、16年前に黒川町の自宅から持ち込んだ「レンギョ」の挿し木が、1本、1本大きな木になって、ビバハウスをぐるりと満開の黄金色で覆ってくれている。中古プレハブのビバハウスが1年中で一番豪華に見えるシーズンだ。

この24日には、「北星余市の存続を何としても勝ち取ろう」との思いの元にシンポジウムが余市町公民館で開かれ、余市ばかりでなく全道からの参加者200名以上が集まった。このシンポジウムの前には、母校のことを心配して、何人もの卒業生がビバハウスを訪ねてくれた。元教員でそろっていつもいるのはビバハウスだけだと彼らは言ってくれている。この中には全道、全国を代表するような芸術家も何人かいて、母校存続と余市地域の発展に役に立つならばどんな協力もするとの申し出をしてくれている。

2期生で現在「縄文風の仲間代表」として全道をリードしている藤本真さんは（造形作家名は大龍我 真）在校2年生のときに独学で「北海道展」に絵画で入選して当時の私達教師をびっくりさせた生徒だった。彼はかつて札幌で行われた同窓会の席に自分の作品を展示してくれた事もあった。彼によれば、余市には、「余市縄文野焼祭実行委員会」が、毎年8月に海浜で野焼きやっっていて、北星余市の生徒達も何人か参加している。余市では縄文遺跡の発掘が進んだ事もあり、この野焼きのイベントに、より多くの北星関係者が参加することで余市町を盛り上げていくことができるのではないかと提案だった。この祭りには、元北星余市の教員だった故伊藤英博先生が長く関わっていた事も知った。

また、北星余市の「地域カレッジ」構想（学校を地域の方々に開放し、教師、生徒共々、地域の方々と直接出会い、交流し合い、学び合う場や、共に行動を起こす機会をつくる）を提案し、人形作家として名を成し地域創成のため大活躍中の奈良県在住21期生、岡本道康さんはこの「地域カレッジ」構想を北星余市高校の存続にも関連させ、余市町で実現させるためにも全面的に協力を約束してくれている。

今回の、シンポジウムを契機に、さらに総力を結集し、1989年の廃校問題を乗り越えた事に続き、今回も北星余市の存続を勝ち取らねばと、夫共々、二人の卒業生の提案を具体的に、実現させる為の方策を打ち合わせ中だ。

一方、ビバハウスでは去年着手した「ビバ農業塾」2年目の活動を4月末から開始した。ところが、現在、入所者8人中4人がアルバイト中、他一人は高校生、もう一人は求職中で農作業参加者は2名しかおらず、農作業が進むのかという本当に嬉しい（悲鳴）ことが起きてしまっている。

しかし、全員が前を向き一步一步進んでいる状況にほっとし、嬉しくなる。

先月入所したTさん（21歳・女性）は大学を中退し（現在通信制の大学に在学中）、ひきこもり、ビバへ。来てすぐにアルバイトを自ら探し、カフェのバイトに見事合格！！アルバイトだけでもすごいことなのに6月北海道千歳市で行われる「フルマラソン」に挑戦したい！と毎日仕事が終わって帰ってきてから練習をしている。開いた口が塞がらないとはまさにこの事だ。

彼女は入所時にこう言った。「悩みが無い事が悩みです。」と。

そんな彼女の奥深くにある「なにか」にこれからしっかり寄り添って、彼女を支えていこうと思う。